

筒井淳也著『数字のセンスを磨くーデータの読み方・活かし方ー』

光文社新書（2023年）

「適当」という言葉には大きく2つの意味がある。一つは「ほどよく当てはまること・程度がほどよいこと」というものであるが、現在よく使われるのは「いい加減なこと」といったマイナスイメージのものではないだろうか。実は、統計において「適当さ」は非常に重要である。もちろん、いい加減なことのほうではなく、ほどよく当てはまるというほうであるが、この「適当さ」は統計を理解する上で欠かせないものなのである。

本書はこの「適当さ」を示しながら数字への向き合い方を示してくれる。はじめに『「数字をそのまま受け入れる」ことも「数字を過度に受け入れない」ことも両方とも想像力の欠如の表れなのです（P. 6）』という指摘があるが、例えばアンケート結果をみてその数字をそのまま何も考えずに信じ込んでしまうこと、アンケート結果に信頼が持てずに数字を見ないことはいずれも好ましいことではない。社会に統計やデータなどの数字が溢れている現在であるからこそ、それをみていくためのセンスが求められており、これを磨くことが本書の主眼となる。

まず、第1章「数量化のセンス」では、数値をみる際の基本として前提となる条件を揃えることが必要であることが示される。ただし、条件を正確に揃えようとすればするほど条件が揃わなくなっていくという「数量化のジレンマ」があるため、数量化は「ベスト・エフォート」（完璧でなくとも最大限の努力をしたもの）であり、これを理解した上で数字をみることが重要だとされる。第2章「比較のセンス」でも、比較するために厳密に条件を揃えると、かえって比較ができなくなるという「比較のパラドックス」について言及され、第3章「因果のセンス」においても「処置のジレンマ」として、因果を検討するためにある数値を他から独立した要素として確立させようとする現実からかけ離れたものになるといった指摘がある。いずれの章においても、共通して数字を意味のあるものにしようとしすぎると逆に数字が意味を持たなくなることが検討されており、アンケート調査の現場においても数字に過度に正確性を求めすぎないこと、つまりほどよく当てはまる「適当さ」が肝要であると改めて考えさせられた。

第4章「確率のセンス」では、自然発生的な偶然にもある程度のバイアスがかかっていることが示され、実は統計学は偶然を制御するのではなく、人為的に偶然を発生させ、それによって確率計算を可能にする技法であることが明らかにされる。第5章「分析のセンス」では、数字をどのように分析するためのデータにしていくかを検討し、構造化されたデータを「要約」するか、「予測」するか、「因果」を考えるか、などどうすべきかの考え方を示している。最後に、第6章「数量化のセンス再訪」で改めて数字をみる上で必要な「個体」という概念が解説され、これを正確に理解することが求められる。

いわゆる統計の解説書というよりは、統計数字をみる上でのまさに「センスを磨く」ことも目的としており、難しい数式などは出てこないのが、文系の方でも安心である。ただ、全体的に抽象的な話が多いこと、さらに内容が深まってくるとある程度は統計の知識があった方がわかりやすいこともあり、できれば統計の入門書と合わせて読むことをお勧めしたい。

（加藤 健志）